

古代語におけるコソの係り結びの意味変化

佐野^{きのきょうこ}恭子 (ワシントン大学)

1. はじめに

石田(1939) 大野(1993)の先行研究によると、コソによる係り結び「A コソ B」には、対立する二命題、「A なら B」と「非 A なら非 B」の対比関係を強調する、という性質がある。例えば、(例文 1)において、前提命題「A なら B」はそれと対照をなす「非 A なら非 B」を後続させる(2)のような論理構造が想定される。

(1) 人こそ知らね、松は知るらむ (万葉集 2: 145)

(2) 「A こそ B (なれ)、非 A は非 B (なり)」

(例文 1) の前提命題(「A なら B」)は、(例文 3)に相当し、これが(例文 1)の文意である。後続命題(「非 A なら非 B」)は、(例文 4)に相当する対比文である。

(3) 人は知らない(が)

(4) 松は知っているだろう

この用法は次第に減少し、已然形が単独で前提句を示す用法(例文 5)が主流となる。大野の分析によると、この段階でのコソ係り結びの論理構造は、後続命題が省略された(6)のようなものである。

(5) 飾磨川絶えむ日にこそ 我が恋止まめ (万葉集 15: 3605)

(6) 「A こそ B なれ Ø」

この構造においての特徴は、已然形があたかも接続部であるかのような「～が」や「～のに」といった意味を持つということである。(例文 5)では、後続命題は省略され、聞き手の推測によって話し手の意図が帰結される(例文 7)。

(7) 飾磨川が絶えるような日に私の恋は止むだろうが(飾磨川が絶える日などないのだから恋が止むことはない)。

已然形が単独で終わる用法では、対比文が主意であると考えられるもの(例文 5)と、単純強調であると解されるもの(例文 8)がある。単純強調の用法における論理構造は(9)のように示される。

(8) 月見ればちちに物こそ悲しけれ (古今和歌集 4: 193)

(9) 「A こそ B なれ」

このように、已然形が単独で終わる用法では、後続命題が主意であると考えられるものと、対比的な意味がなく単純強調であると解されるものがあるが、この意味解釈の違いについてはっきりとした見解は得られていない。大野の分析によると(6)は意味的には(2)と同等であるが、対比語が明示されないという点では(9)と同等である。

本稿の目的は、特定の形「A コソ B メ」に注目し、それぞれの段階で観察される意味特性の違いを比較調査することによって、「コソ+已然形」に見られる意味の変化に通時

的な説明を与えることである。これにより、用法による意味の違いを、意味変化における変化の要因として捉え直すことができる。

2. 非単独用法から単独用法への移行

半藤(1998)によると、「取り立て」には「係りと結びの意味的關係を特に際立たせることで主題および対比の文を作る働き」があるとする。本稿では、コソが取り立てであって対比を伴う対比強調と、対比が明示されない排除強調の間には意味的な相違があり、後続する対比文が脱落する前と後ではコソによる選抜の度合いに違いがある、と論ずる。

ここでは「コソ～メ」の形をしている例に注目し、已然形の非単独用法(例文 10)と単独用法(例文 11)の間にどのような意味の違いが認められるか観察することにする。

(10) 今こそ我鳥にあらめ 後は汝鳥にあらむを (古事記 I: 大国主神 3)

(11) 今こそ鳴かめ 友に逢へる時 (万葉集 8: 1481)

(例文 10-11) の論理構造は(例文 12-13)となる。

(12) [A] is B [今][我鳥である]

Non-A is non-B. [後][汝鳥である]

(13) [A] is B [今][鳴かむ]

Non-A is non-B. [今でない時][鳴いて欲しいわけではない]

まず、(例文 10) の論理構造 (12) を見てみると、文意「今我鳥にあり」が含意されている。これは、助動詞の「む」が「話し手の知識の内容」(いわゆる「婉曲」)を示している事による。ところが(例文 11) の論理構造 (13) では、文意は「今鳴く(だろう)」であるが、この命題ではその内容が真であることが含意されていない。これは、(例文 11) が「今鳴いて欲しいのに」という望み(希求)であり、その真が発話時に成り立っていないということが含意されているからであろう。この用法においては、「む」が「話し手の知識の内容」ではなく、「非現実」である。(例文 10) の用法では<A なら B>を含意するが、(例文 11) では含意しない。

(例文 10) と(例文 11) のもう一つの大きな違いは、<非 A なら非 B>を必然的に導くか、である。対比構造が後に続く(10)のような例では、<非 A でも B>「今は我鳥だが、今でなくても我鳥であるかも知れない」は可能である。It is A that B のように A を焦点化して「我鳥であるのは今(だけ)であるが、後は汝鳥でしょうが」というのは不自然である。これに比べ、単独已然形用法の(11)では、<非 A でも B>「今でなくても鳴いて欲しい」というのは非論理的である。これは(11)が A を焦点化した「鳴いて欲しいのは今(だけ)である」というような意味になっており、「鳴いて欲しいのは今(だけ)であるが、今でなくても鳴いて欲しい」が非論理的なのと同じである。つまり、単独已然形用法の時には<非 A なら非 B>が必然的に成り立っている。

次に、コソが条件節についている「コソ～メ」の例での已然形非単独用法(例文 14)

と単独用法（例文 15-18）を比較してみよう。

(14) 死なばこそ 相見ずあらめ 生きてあらば 白髪児らに 生ひざらめやも

（万葉集 16: 3792）

(15) 天地といふ名の絶えてあらばこそ汝と我と逢ふこと止まめ（万葉集 11:2419）

(16) 薦枕あひまきし児もあらばこそ夜の更くらくも我が惜しみせめ

（万葉集 7:1414）

(17) 人を思ふ心の木の葉にあらばこそ風のまにまに散りも乱れめ

（古今和歌集 15: 783）

(18) 商返し許せとの御法あらばこそ我が下衣返し賜はめ（万葉集 16:3809）

(19) [A] is B [死なば] [相見ずあり]

Non-A is non-B [生きてあらば] [白髪児らに生ひむ（相見む）]

(20) [A] is B [天地たえてあらば] [汝と我と逢ふこと止まむ]

Non-A is non-B [天地たえずあらば] [汝と我と逢ふこと止まらず]

非単独用法（例文 14）では、文意である「死んだらお互いに会うことはないだろう」が含意される。ところが、単独用法（例文 15）では、文意＜A なら B＞である「天地が絶えたらお互いに会うことはないだろう」は、現実にはありそうもないことであり、大野によれば、この部分は結局話し手によって否定されてしまい、そこから＜非 A は非 B＞である「天地が絶えることなどないのだからお互いに会うことをやめることはない」と帰結されるという。この時、「天地が絶えることがなくても、お互いに会うのをやめるかもしれない」は非論理的であり、＜非 A は非 B＞が必然的である。助動詞の「む」の意味も、（例文 14）では、話者の知識の内容を述べているが、（例文 15-18）では、非現実的・反事実的な意味となっている。従って、（例文 15-18）では、文意＜A なら B＞は含意されていないが、＜非 A は非 B＞が伝えられた意図である。

「コソ～メ」に近似した形でコソが時間副詞句「～する日に」についている時はどうであろうか。（例文 21）では対比文が倒置されていると見ると、已然形非単独用法であるといえよう。それに対し、（例文 22）の単独用法がある。

(21) 恋ひ死なむ後は何せむ我が命生ける日にこそ見まく欲りすれ

（万葉集 11: 2592）

(22) 散りぬれば恋ふれどしるしなきものを今日こそ桜折らば折りてめ

（古今和歌集 64）

(23) [A] is B [生ける日に] [見まく欲りす]

Non-A is non-B [死なむ後は] [何せむ]

(24) [A] is B [今日] [桜を折るなら折ってしまおう]

Non-A is non-B [散ってしまった後は] [恋してもどうしようもない]

(23) では＜非 A でも B＞「死んだ後でも逢いたい」は可能である。この副詞節を焦点

化した「逢いたいのは生きている間（だけ）である」というのは話者の意図とはいえない。ところが、(24) では「桜が散ってしまった後でも折ってしまおう」は矛盾であり、 $\langle \text{非 A なら非 B} \rangle$ が必然的に成り立っている。また、「折るならば（桜が散っていない）今日しかない」という焦点化された意味が成り立つ。このように、どの例を取ってみても、已然形の非単独用法と単独用法の間にはコソの選抜の度合いに違いがある。

3. コソの意味強化

上記のような意味の変化は、まさにコソの意味するところが「主題による対比」から「焦点化による対比」に強化されたことを物語っている。ここで意味強化とは意味的にどのような現象か、また、どのように生起するのかについて、生成言語学の意味研究を参照、検討したい。

コソが焦点化の役割を果たすことは、すでに生成言語学の中で指摘されている。John Whitman (1997) では、コソ已然形も連体形留めの係り結び文と同様に Focus Construction（焦点化構文）であると述べた。この分析によるとコソは上接する語を焦点化し、已然形は Focus（焦点）の領域の標示である。Frellesvig (2010 : 249, 255) でも、コソの係り結びが it-cleft 文に近似しているとし、Focus（焦点化）であるとしている。

意味の強化についての研究では、Geis and Zwicky (1971) が、意味強化は「導かれた類推」によって生起すると述べている。自然言語で ‘if A, then, B’ のような仮定条件文が使われた場合、その意味は $A \rightarrow B$ （「A なら B」）であるが、真偽条件では必然的でない「非 A なら非 B」の意味を類推によって伴うことが多々あるという。例えば、「芝を刈ってくれたら 5 ドルあげよう。」という条件文を、「芝を刈る \rightarrow 5 ドルもらえる」だけでなく、「芝を刈らない \rightarrow 5 ドルもらえない」と解釈することがあることが多い。

Horn (2000) によると、この現象は ‘if A, then, B’ が何らかの文脈の影響を受けて ‘only if A, B’ のような意味が加えられ限定された結果、‘iff (if and only if) A, B’ というような意味に限定強化された結果であると述べた。コソが only の意味とどう関わるか。英語の only 文を見られたい。

(25) Only [Chris]_{Focus} came on time.

文意: Chris came on time. （話題でない内容）

排他的な命題: No one other than Chris came on time. （話題である内容）

（例文 25）で、Chris が焦点化され、Only は、焦点化された語句にかかってその語句を限定強調する。Horn (2014) によれば、英語の only 文には、コソの係り結びと同様、文意と意図された（排他的な）意味とがあり、その両者を含意する。この時、文意は「A なら B」、排他的な命題は「非 A なら非 B」である。ところが、「話し手の意図」という観点から見た場合、文意の方は意図されていない一方、類推によって導かれた排他的な命題が話し手の意図する内容である。

ここで大事なのは、コソの係り結びの単独用法において、已然形にいわゆる逆接的な意味がある時には、文意は話題とならず、排他的な意味の方が話題であると感じられる、(26) のようなケースが多いということである。

(26) [A] is B [飾磨川絶えむ日に] [我が恋止まむ] (話題でない内容)

Non-A is non-B [飾磨川たえずは] [我が恋止まず] (話題である内容)

そこで、コソにも限定強調の意味が加わったと考える。Fox (2007)は、限定強化を *exhaustivity* (いわゆる「上限」) であるとした。コソの係り結びにもこのような限定の意味が加わったと考えると、論理構造 (26) は (27) によって生起したと仮定される。

(27) Only [(飾磨川)絶えむ日に]_{Focus}こそ 我が恋止まめ

(27) に示された通り、only のような要素が焦点化された語句にかかってその選抜を強化し、「非 A なら非 B」がコソの持つ意味として意味化した結果、必然的に対比文が表現されなくなった、と結論することができる。

4. 已然形の再分析

次に単純強調と呼ばれる例を挙げる。

(28) 位こそなほめでたきものはあれ (枕草子 179)

(29) 山里は秋こそことにわびしけれ (古今和歌集 214)

(30) [A] is B [秋に] [山里はことにわびしけれ] (話題である内容)

Non-A is non-B [春に] [山里はわびしけれ] (話題でない内容)

大野 (1993) は、このようなコソ已然形を「単純強調」とよんだ。単純強調の時には、已然形に逆接の意味がなく、コソが修飾する文が真であることを伴う強調である。已然形の終止用法の確立はどのような変化をもたらしたのか。一つには、「A なら B」が含意されるようになった。また、話題としての内容であると解釈されるようになった。

もう一つは、コソが数量的な表現についての時の強調の仕方に違いが現れる。例えば、「1 滴も飲まない」と「1 滴は飲む」では、「も」と「は」により何が排除されるか (1 滴以上・以下 (飲む)) に違いがある。これと同じようなことが「昨日こそ」のような時間副詞にも言え、その上限をどこに置くかが意味変化の前と後では逆である。逆接的な意味のある時には、上限は昨日以前に置かれるが、単純強調では、上限は昨日以後に置かれる。次の例を見られたい。

(31) 昨日こそ年は果てしか春霞春日の山にはや立ちにけり (万葉集 1843)

(32) 昨日こそ早苗取りしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く (古今集 172)

(例文 31)において、「昨日」を伴った命題は、「たった昨日年が暮れたばかりなのに」という訳の通り、昨日から発話時までの事態に言及する。それに対し、(例文 32)においては、昨日以前の事態について述べており、昨日から発話時までとのつながりは断ち切られている。この違いは已然形「しか」が感嘆の陳述「話し手が～を期待していなかつ

た」(Akatsuka1985, Rett 2011) を持つかにある。例えば、(31) においては、「年が暮れたのが昨日だった」ということが驚きだったのではなく、「春霞がたった」ことに驚いたのである。(32) においては、「早苗を取ったのは昨日だった (と思っていた)」ということ自体に驚きを表現している。

これらの意味変化は、已然形が接続用法から感嘆の陳述としての用法に再分析された結果である。ここでは、已然形が感嘆文の文末として用いられるようになったことから、肯定文としての用法を確立し、単純強調に至る要因になったと考えられる。

5. おわりに

コソの係り結び文における意味変化について論じた。コソが已然形にかかって逆接条件句を形成したが、コソの意味が強められたことにより、已然形の接続用法が単独用法に移行した、と述べた。それに加えて、已然形が感嘆の陳述として再分析され、文意が話題である内容になった。これにより、コソのつく副詞の解釈もその陳述に直接かかっていると認識されるようになり、単純強調として解釈されるようになったと述べた。

参考文献

- Akatsuka, N. (1985) "Conditionals and the epistemic scale." *Language* 61.3: 625-639.
- 石田春昭(1939)「コソケレ形式の本義 (上・下)」国語と国文学 16.2, 16.3.
- 大野晋 (1993) 「係り結びの研究」岩波書店
- 此島正年 (1966) 「国語助詞の研究—助詞史の素描—」桜楓社
- 薦清行 (2011) 「コソ・已然形研究史抄」日本語・日本文化 37: 35-57.
- 半藤英明 (1998) 「『限定』と『取り立て』の視座」国語国文 67.3: 42-53.
- Fox, D. (2007) "Free choice and the theory of scalar implicatures." In *Presupposition and implicature in compositional semantics*. Palgrave Macmillan, London., 71-120.
- Frellesvig, B. (2010) *A History of the Japanese Language*. Cambridge University Press.
- Geis, M. and Zwicky A. (1971) "On invited inferences." *Linguistic inquiry* 2.4: 561-566.
- Horn, L. R. (2000). "From if to iff: Conditional perfection as pragmatic strengthening." *Journal of pragmatics* 32.3: 289-326.
- Horn, L. R. (2014) "Information structure and the landscape of (non-)at-issue meaning." *The Oxford handbook of information structure*.
- Quinn, C. J. (2015) "Why *izenkei* in *koso*-focused *kakarimusubi*? – some considerations." A handout from International workshop *Kakarimusubi* from a comparative perspective.
- Rett, J. (2011) "Exclamatives, degrees and speech acts." *Linguistics and philosophy* 34.5: 411-442.
- Whitman, J. (1997) "*Kakarimusubi* from a Comparative Perspective." in *Japanese Korean Linguistics* 6, 161-178.
- 「新編日本古典文学全集」(1994-2002) 東京：小学館, <https://japanknowledge-com>